

&lt;特別寄稿&gt;

## 天野正子の生活思想

—生活者視点の継承と現代生活学—

上村 協子

キーワード：現代生活学 生活者 継承 花森安治 ジェンダー

### はじめに

天野正子。1938年3月広島市生まれ。2009年4月から6年間本学の学長をつとめられた。当時、東京家政学院大学は、短期大学を閉じて、家政学部・人文学部を現代生活学部一学部としてスタートさせる時期であった。天野先生はフリースペースとしての人間に「成長」があるとすれば、その源泉は人との出会いとつきあいにあると、教職員や学生と積極的に交流され、2015年3月19日大学卒業式では病をおして自ら告示を語り同年5月1日逝去された。

東京家政学院が蓄積した家政学の上に、天野正子はどのような現代生活学を展開することを意図したのか。また今後そこから何が継承できるのか。本論のテーマを天野正子の生活思想として考察する。

2015年3月19日大学卒業式告示については2015年5月発行「学院だより」参照

〈目的〉天野正子（1938～2015）先生（以下正子）について（1）ジェンダー研究、（2）老いがい、（3）生活思想の3つをキーワードに、高校教師時代から東京家政学院大学学長を終えるまでの、時代経験を探る。

〈方法〉第1の「ジェンダー研究」では「天野正子生活と研究のあゆみ」（天野郁夫発行2015年10月10日如水会館偲ぶ会で配布）を基盤に『フェミニズムのイズムを超えて』に至る正子の意識変容に注目する。第2の「老い」では「日本の老い」が蓄えていた体験知〈老いのまなざし〉をとりもどすことをめざし日本映画にみる『〈老いがい〉の時代』へと展開させた正子の仕事を整理する。第3の「暮しの思想（生活思想）」では『戦後思想の名著50』で正子が〈くに〉をみかえす〈暮しの美学〉とした花森安治に焦点をあて『生活者とはだれか』（中公新書1996）「生活者」論との関わりを整理する。

### 1. ジェンダー研究：『フェミニズムのイズムを超えて 女たちの時代経験』まで

#### 1-1 もう一つの学生運動から

お茶の水女子大学で教育社会学を専攻した正子の卒論テーマは「川口鋳物工場で働く青少年の労働と学習意欲の構造」。のちに映画『キューポラのある町』（吉永小百合主演）の舞台となる川口市の鋳物工場がフィールドである。卒論のキーワードは「下請け零細」の鋳物工場、下部構造の「労働関係」、学習意欲にみる「主体性」である。60年反安保デモのあいまにフィールドでヒアリングを重ね、徹夜で書き上げたお茶大の卒業論文は文芸誌『河』6号（1962年1月）に掲載された。

正子は学生時代、世界学生奉仕団（World University Service = W・U・S、以下ウス）日本支部の

メンバーとして、多彩な大学の友だちと出会う。ウスは、第一次世界大戦後ドイツとオーストリアの学生救済活動からスタート、各国の大学の教職員と学生が「健全な」大学共同体づくりを求めて、相互の協力を目的に活動する団体である。日本では第二次世界大戦後の1948年、矢内原忠雄（元東大総長）や東大の学生部長だった西村秀夫など、内村鑑三の無協会派の精神を継ぐ人たちが中心で学生救済活動から始まり学生サナトリウムの建設やそのための募金活動、大学をこえたセミナー活動にも力を入れた。正子は夏休みの日々、ウスの活動に参加してミッションスクールから仏教系無宗教系まで九州から北海道まで、大学も所属学部も違う学生たちで泊り込み、「学生の社会的責任」という「まじめ」なテーマを中心に徹夜で語り明かした「時代経験」をもつ。

60年、反安保で明け暮れる時代。もっぱら外部にむかって「革命」を説く自治会活動の足をひっぱるヒョウな「もう一つの」学生運動と外部からたたかれながら、ウスは大学の内部にとどまって大学を少しでもよくする方向を考える。ウスの活動や仲間とのつながりは、後にサークル・ネットワーク論を展開する契機となり正子の「フリースペースとしての自分」という生活思想の視点を形成する基盤となっていく。

大学院へ進学する気は正子にはなく、卒業して川崎市立の中学校で二年、公立高校に移って三年間、『現代社会・倫理』担当の教師になる。高校教師時代にはじめて原稿料をもらって書いたのが、雑誌『思想の科学』である。雑誌『思想の科学』は、1946年、武谷三男、武田清子、都留重人、鶴見和子、鶴見俊輔、丸山眞男、渡辺慧の7人の同人によって創刊された。正子は15枚程度の短い依頼原稿に「もう一つの学生運動」というタイトルで学生時代のウスの経験を書いた。書いて送ったら、すぐに思想の科学研究会の創立者の一人鶴見俊輔から「書き直し」と送りかえされてきた。「短い原稿は書き出しの三〜五行こそ大切だ。原稿全体にかかるエネルギーの半分を書き出しに注いでほしい」という添え書きがあったという。そこから正子に思想の科学との付き合いが始まる。

## 1-2 準専門職のプロフェッショナルリゼーション論

5年間の教師経験を経て、1966年、28歳で当時の東京教育大学（現・筑波大学）の大学院研究科・社会学専攻に進学する。大学院の研究テーマは日本社会における「準専門職の専門職業化論」である。看護婦（看護師）や教師、ソーシャルワーカーなど、形成途上ないし境界線上にある専門職を準専門職といい日本の専門職業化（プロフェッショナルリゼーション）論を展開するのに労使関係論で当時すぐれた仕事をされていた間宏先生に指導を受けたかったことが東京教育大を選んだ理由である。当時の東京教育大学には、中野卓先生や森岡清美先生など、社会学の世界で独自の研究領域を開拓された先生がたが、40代という油ののりきった年代で在籍されていた。

入学して1年たったところで、長女の出産のために休学。修士論文をかいて博士課程に進んだところで、長男出産のために休学した流れを各駅停車の旅と正子が表現する。中野卓先生から「子どもを育てることも社会学を学ぶことだと思う」と声をかけられたことが、その後の研究生生活を継続する力になったという。

二人の子どもの出産・子育てを経験することで、正子の問題関心の準専門職論の課題設定は、より切実に同時代の社会的現実（いいかえれば状況）のなかに埋め込まれた。しかし研究「方法」はアメリカのプロフェッション研究を支配していた機能主義の枠組みを、そのまま援用し状況の「外」におかれ「外」からのぞき込む手段としてしかとらえられていなかった。

さらにプロフェッショナルリゼーションという概念規定だけでなく、プロフェッションを、①「確立した」プロフェッショナルリゼーション②「準」専門職、③疑似プロフェッションなどに分類する近代的な手法それ自体、日本社会の看護婦という職業を扱うには限界があったと、しばらくたってから正子は気が付く。またクライアントに対する根元的配慮という、職務としての看護の独自性を忘れ、看護という職業の専

門職業化を、男性によって専有される「確立した」プロフェッションを基準にとらえる発想自体、知識の男性中心性という偏りを内包していた。当時、そのことに自覚的ではなかった。

問題は二つ。一つは、外国からあたえられたものとしての方法と、その方法が適用される素材としての日本社会の現実との間に深い乖離があった。もう一つは、近代主義的な職業観（職業は確立したプロフェッションの方向に進化するのが望ましいという）を無自覚的にあてはめていたことの問題があったとのちに振り返っている。

その後、正子は夫の転勤に伴い、名古屋の南山短期大学（南山大学の短期部）の人間関係学科に専任講師として就職。女性のライフサイクル論や「女性のなかの家族」論を担当する。五年後に同じ名古屋の金城学院大学文学部社会学科に移る。第三期とは子育て以後の時期という意味である。金城学院大学助教授時代に単著『第三期の女性—ライフサイクルと学習—』（学文社 1979）を、教授時代にも単著『転換期の女性と職業』（学文社 1982）を出版している。名古屋時代に「思想の科学」研究会に正式メンバーとして参加し、「日本の地下水」欄（ミニコミ紙の紹介欄）を担当し、また四百字詰め四〇枚程度の原稿を何本も書く機会をもらうことになる。1984年4月に千葉大学に異動するまで、名古屋から東京の研究会に参加する生活が続いた。『自立神話を超えて—女たちの生と性—』（有信堂 1987）は、千葉大学時代に出版された。

### 1-3 『フェミニズムのイズムを超えて 女たちの時代経験』（岩波書店 1997）

正子の女性高等教育論や、女性の「学歴と階層」研究については、九〇年代の前半頃、若い世代の研究者から批判されることになる。エリート女性を対象とした「達成」や「平等」研究への偏りがある。学歴の表示する「能力」それ自体が「男性」を基準にしているなどが焦点であったという。

岩波書店から1997年に出版された天野正子の単著『フェミニズムのイズムを超えて』（以下「フェミニズム」）はそれに対する答えの一端を示す1冊であり6本の論文が掲載されている。6本の論文のうち、書き下ろしは『「つきあい」の戦後史—サークルとネットワークの創造力』1本のみである。

5本の論文の初出を確認したい（「フェミニズム」pp.292-293 初出一覧 参照）。

最も古い論文は1988年初出のものである。(1)「働かされ方から働き方へ—ワーカーズ・コレクティブの実験」。(初出は「受」働から「能」働への実験—ワーカーズ・コレクティブの可能性」文眞堂)

1995年初出の3論文はいずれも岩波講座からである。(2)〈解放〉への出発—ジェンダーの五五年体制(初出は『戦後日本・占領と戦後改革 第三巻』「戦後思想と社会意識」解放された女性たち)、(3)等身大の自画像—自己決定権の形成にむけて(初出は『日本通史第二巻』「現代2」問われる性役割)、(4)政治の知をくみかえる—「主婦」とフェミニズムの対話(初出は『現代社会学11』「ジェンダーの社会学」「ジェンダーと政治」の未来図)である。1995年は、千葉大学からお茶の水女子大学に正子が異動した年である。

ここで注目したいのは1996年論文、(5)戦後史の立会人 —〈千刈あがた〉の世界—である。岩波講座「現代社会学9」「ライフコースの社会学」から「中年期の創造力—千刈あがたの世界から」として掲載され本書『フェミニズムのイズムを超えて』冒頭に置かれた論考である。

千刈あがた(1943～1992)は40歳の誕生日を迎えるという「遅い」時期に作家デビューをした。なぜ千刈を注目したのか。正子によれば、1943年生まれの千刈あがたの世代(1940～44年のコーホート＝出生集団は、第三期の出現とその長期化という女のライフサイクル上の変化に「自覚的」にむきあうことになった最初の世代といってよい。「人生50年」時代に生まれ40歳近くになってみると、時代は「人生80年」時代に移行していた。(「フェミニズム」p.6)「もっと若かったらこんなことしなかったと思う。もっと老いていたら人生を諦めていたと思う。四十歳だから」。(「フェミニズム」p.4)女にとっての40歳は子どもの巣立ちと生理的年齢のつくる若さの美の喪失、いいかえればすべての「幻想」への訣別で

あり、それとともに、「今までを振り返り、老いにむかってこの先をみつめ、態勢を整えなおす峠のような場所とかいている（『フェミニズム』p.6）。正子は「峠は決定をしいるところだ」ではじまる真壁仁「峠」1969年新潮社を論文のはじまりにおいてその時代の女性たちに求められる決定についてクローズアップしている。

千刈は『継承』ということばを好んで使う。

先を歩んだ人から何を受け継ぎ、あとから来る人に何を伝えていくかということ、タテのつながりだけではない。いまという同じ時代に共に生き、それぞれの場所で考えたり行動している人が、響きあっていくことも継承だと思う。男の仕事はとすると競い合いになりがちだが、女たちの仕事は小さくても継承により大きな力になっていけると思う。（千刈あがた『40代はややこ思惟 いそが恣意』1988 p.238）

#### 表1 天野正子 略歴

1938年3月 広島市に生まれる  
 1950年4月 ノートルダム清心中・高等学校入学 1956年3月 同校卒業  
 1957年4月 お茶の水女子大学大学文教育学部入学 1961年3月卒業（教育学士）  
 1961年4月 神奈川県川崎市立高津中学・高等学校教諭  
 1966年4月 東京教育大学大学院文学研究科（社会学専攻）入学  
 1970年3月 同研究科修士課程修了（文学修士）1973年3月同研究科博士課程中途退学  
 1973年4月 南山短期大学人間関係科専任講師（社会学基礎論）  
 1978年4月 金城学院大学文学部社会学科助教授（現代社会論）1983年4月同教授  
 1984年4月 千葉大学文学部行動科学科助教授（社会学講座） 1986年10月同教授  
 1995年4月 お茶の水女子大学文教育学部人間社会学科教授（社会学講座）  
 1999年4月 同大学大学院後期課程人間文化研究科教授（比較社会論）  
 2003年3月 同大学退職・名誉教授  
 2003年4月 東京女学館大学国際教養学部教授  
 2006年4月 同大学副学長  
 2007年4月 同大学学長 2008年3月 同大学退職  
 2009年4月 東京家政学院大学・短期大学学長 2010年5月同大学・大学院学長  
 2015年3月 同大学退職・名誉教授  
 2015年5月 永眠

「生活と研究のあゆみ」 pp.32-33

「フェミニズム」の「あとがき」に正子は次のような文章を書いている。

いまフェミニズムは、イズムとして「思想と運動」の理論化と体系化に忙しい。フェミニズムがそうして抽象の梯子をのぼり、アカデミズムの世界で市民権を獲得することは、それはそれで大切な方向である。しかし、それと同時にフェミニズムは、「女であること」の意味が発言する「現場」に立ち、思想に方向性を与える思想以前のエートス（行動の原動力）として、女たちの経験を丹念にくみあげていく、方法としての「現場」の発想を手放してはならない。「現場」の発想とは、いいかえればロウ・アングルの視点設定である。（『フェミニズム』 pp.289-290）

## 2 「生—老—死」をつなぐ視点：老いがいの時代へ

### 2-1 「老いの近代」と「老いへのまなざし」

まもなくこの地球が年老いた人びとでみだされる日がやってくる。高齢社会が日本だけでなくまた先進国だけでなく、開発途上国を含めて世界全体が到達する未来社会となる日は遠くはない。・高齢化は世界全体に及ぶ大きな潮流である。それは、地球規模での生の充実を創りだすための人類全体の挑戦となる。（『老いの近代』 もう一つのプロローグへ 「われ感ずるゆえにわれあり」の世界 pp.231-232）



天野正子著『老いの近代』は日本の50年日本の200年岩波書店シリーズとして1999年。お茶の水女子大学教授の時代出版された。7年後2006年に本のサイズを小さくして『老いへのまなざし—日本近代は何を見失ったか』平凡社ライブラリーとして出版されている。多くの読者に求められた本であることが示されている。

第一部「生と老い」をつなぐ—老いるの地平へ—には、宮本常一『忘れられた日本人』が登場する。祖父が10歳にならない宮本を村の寄り合いにつれていった経験、寝物語の昔話に動物と人間と神々が互いに交流しあうマメダの世界の存在を教えてくれたことをとりあげる。「幼」と「老」の間にあるいは神話的時間が共有され親と子の間では見られぬ相互に補い合う関係があった。同じ暮らしのなかで、身近に老人をみて育つ子どもたちは、自分の身体にも老いや死が避けがたいものとして宿っていることを知らされる。・・・自分の歩んできた時代体験を次の世代に手渡す。自分が死んでもその体験は孫のなかに残り引き継がれる。・・・老いは、若さの「喪失」だけでない。アメリカの精神科医、E・キューブラー・ロスの著書『死ぬ瞬間の対話』なども注目されている。柳田国男が『明治大正史 世相篇』で描き出す「位牌を背負ってさまよう老人」は1929年（昭和4年）の師走の寒い雨の夜に先祖の位牌45枚を包んだ風呂敷包みひとつを背負ってさまよう95歳の老人に及ぶ。

第二部「昭和の老い」—終わりのない旅—には、「最後」の被爆者として、老いゆく〈未復員〉、在日朝鮮人の選択、アイヌ語の再生、第三部 老いのパフォーマンスとしては1長寿と記憶の共同体—沖繩から吹く風、2文体と老い—吉野せいの世界、3老いの未完成交響曲 職人の技、4演じる老い・生きられる老い「おばあさん」俳優、5「悪女」集団の四〇年 一女と老いが掲載されている。

正子が老いをテーマに研究をはじめたのは40歳代のころ。思想の科学研究会「老いの会」のメンバーで『老いの万華鏡』（お茶の水書房、1987年）をまとめたことである。また老いの会メンバーの一人である折原脩三の影響が大きい。だが、最も端的にこのテーマへの正子の姿勢を表しているのは旧版のあとがきの次の正子の文章ではないだろうか。

私のふるさととは広島である。近親者の多くは、老人「問題」を考えさせられるほどには長生きできなかった。被爆体験が影響しているかどうか、因果関係は分からない。とにかく老いたくても老いることのできなかった近親者がいた。老いを迎えることができなかったその人たちの墓前にたたずむとき、老年期を迎えることは一つの「特権」なんだ、という思いを逃れることができない。

『老いの近代』 あとがき pp.255-256

## 2-2 昭和の老い

昭和の老いについて、ここではドクフレンをとりあげる。

独身婦人連盟（以下 独婦連）が産声をあげたのは1967年である。「ドクフレンと申しまして毒婦連ではありません。」という「女性シングル時代」を予見させるフレーズは、1978年4月号『思想の科学』『日本の地下水』に「わだつみの声をとわに」とのタイトルで書かれて以来、『第三期の女性—ライフサイクルと学習』（pp. 210～213）（『フェミニズムのイズムを超えて』（pp. 143～146）、『老いへのまなざし』（pp. 247～250）などたびたび正子の文章に登場する。

戦争は戦死者の数だけ独身女性を大量に出現させた。1965年の日本では、35歳から49歳層の女性の数は男性よりも255万人も多かった。会員300名の全国組織（会長 大久保さわ子）。独婦連中心メンバーは1920年生まれの当時40歳代の女性たち。戦争が終わり、「もはや戦後ではなくなった」時代に、彼女たちを戦争との関係で見ようとはせず、嫁ぎそこなった「オールドミス」への「中傷の目、憐憫の目」でみる。独身中高年女性に対する視線への怒りを自分たちの手で明るみに出そうとする「被害者」意識と、「ひとり身の女」としての自分の生き方を主体的にひらいていこうとする内的動機が矛盾なく統合されて

以後の毒婦連ならぬ独婦連の活動を支えた。

独身女性の場合、老後は自身の問題であるだけではなく、老親の介護の問題でもあるという二重・三重の切実さをもっていたし、今でももっている。母親が倒れ、翌日から仕事をやめ死ぬまで看病し母は2年7カ月で帰らぬ人になった西股よし子の文章をもとに示される。「うまいこと看病せんとゴメンの。私もあの世に行ったら今度こそ親孝行するでかんにんしてや。だけど私には死水を取ってくれる者も、ねたきりになっても看病してくれる者もないのやぜ、あんたはんはまだしあわせや。化けて出んとおいてーいナア。そやけど、早う死んでくれてほんとうにありがとうの」

正子はこの後に、次のような文章を続ける。

この世でたったひとりの身内の母親に「早う死んでくれてほんとうにありがとうの」といわねばならぬ日本社会の老いをめぐる現実には暗い。しかし、西股よし子の文章は不思議なほど明るい。そうした彼女の「明るさ」の背景には、辛いときはいつでも「頼む、助けて」といえる関係をつくろうとしてきた独り身の女性たちの共感と励ましの世界がある。 (『老いの近代』あとがき pp.217-218)

1999年4月4日、読売新聞には広岡守穂、毎日新聞には杉浦日向子が、『老いの近代』の書評を書いている。まず、広岡の出だしの文章を紹介しよう。

この著者の本が出るのを楽しみにしている人は少なくないだろう。わたしもその一人である。広角レンズを自在に駆使するようにして生活世界のあれこれに照明を当てる。それによって、社会現象の根元に横たわっているものの姿をみせてくれる。手法はたしかに社会学者らしく手堅いのだけれど、ただの学問の枠におさまりきらない独特の魅力がある。読んでいるうちに、やわらかく励まされているような気分になるのだ。マイペースのままで生き方を変えることができるというか、そんな希望や元気を知らぬ間に与えられている。 広岡守穂 読売新聞 1999年4月4日

杉浦日向子の書評のタイトルは「あきらめる」は明らかに究めること。文章の締めで吉野せい次の文章が引用されている。「歩きつづけた昨日までの道を別に前方なんぞ気にせずに、おかしな姿でもよい。よろけた足どりでもかまわない。まるで自由な野分の風のように、胸だけは悠々としておびえずに歩けるところまで歩いてゆきたい。」杉浦日向子 毎日新聞 1999年4月4日

ライブラリー版では、上野千鶴子が「老い」の新しい読み方をあとがきとして解説している。

## 2-3 先祖になる：『〈老いがいい〉の時代』

『〈老いがいい〉の時代』の〈老いがいい〉というユニークな岩波新書の題名は池谷薫監督ドキュメンタリー『先祖になる』(2013)から生まれた。東日本大震災から39日目。2011年4月津波被害が大きかったまち岩手県陸前高田市気仙町の朝、吐く息はまだ白い。60年以上きこりとして働いてきた佐藤直志77歳。消防団員の息子は津波にのまれ、自分が建てた家も水につかった。「山に帰る」人が亡くなることを、彼はそう表現する。「仮設住宅から山に帰りたくない。先祖が生きてきた元の土地に家を立て直し、自分が先祖になる」カメラは、佐藤の1年半を追う。その映像を見て正子の脳裏には「生きがいい」でも「死にがいい」でもない〈老いがいい〉という言葉が浮かんだという。

天野正子『〈老いがいい〉の時代—日本映画に読む—』岩波新書は2014年3月の発行である。日本映画64作品以上が登場する本書では、実にさまざまな老いや死が描かれる。たとえば、葬儀の際の遺体を扱う納棺師を描いた『おくりびと』(2008)、「痴」がひらく世界『ペコロスの母に会いに行く』(2013)。読み進めるうちに、「われ考えるゆえにわれあり」ではなく、老いのもう一つの時間軸である「われ感ずるゆえにわれあり」の重要性に気づかされる。

人生の節々で想起こされる「生—老—死」をつなぐ視点、本論では老いについて「子ども—老人」の連合に注目したい。センス・オブ・ワンダー、子どもがもつ神秘さや不可思議さに開かれた感性を指摘したのは沈黙の春のレイチェル・カーソンであるが、子どものセンス・オブ・ワンダーを分かち合え

る大人は、現役の大人ではなく、まもなく彼岸へと旅立つ老人ではないかと正子はいう。「子ども—老人」連合が主題となる映画として、大林宣彦監督『水の旅人 侍 KIDS』（1993）『あの、夏の日とんでろじいちゃん』（1999）相米慎二監督『夏の庭 The Friends』（1994）などがあげられている。

表2 天野正子 主要単著 一覧

- 1) 第三期の女性—ライフサイクルと学習— 学文社 1979
- 2) 転換期の女性と職業—共生社会への展望— 学文社 1982
- 3) 自立神話を超えて—女たちの生と性— 有信堂 1987
- 4) 「生活者」とはだれか—自律的市民の系譜— 中央公論社 1996
- 5) フェミニズムのイズムを超えて—女たちの時代経験— 岩波書店 1997
- 6) 老いの近代 日本の50年日本の200年 岩波書店 1999
- 7) 「つきあい」の戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平— 吉川弘文館 2005
- 8) 老いへのまなざし—日本近代は何を見失ったか— 平凡社 2007
- 9) In Pursuit of the Seikatsusha: A Genealogy of the Autonomous Citizen in Japan Melbourne: Trans Pacific Press 2011
- 10) 現代「生活者」論—つながりを育てる社会へ— 有志舎 2012
- 11) 〈老いがい〉の時代—日本映画を読む— 岩波書店 2014

「生活と研究のあゆみ」 p.36

### 3. 生活の学問と暮らしの遠い距離

#### 3-1 現代生活学定義とその背景

現代生活学とは、生命の維持、生活の質を重視する生活者の視点から、人間生活における個々人の日常的行為と（それを成り立たせる）生活の諸条件（社会・環境・歴史的条件）の相互作用について、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、持続可能な生活の創造に貢献する実践的総合科学である。（天野正子 試論「家政学」から「生活科学」へ、そして「現代生活学」へ）

天野正子が日本家政学会定義をもとに2013年9月5日に示した現代生活学の定義である。正子による現代生活学定義のポイントは「生命の維持、生活の質を重視する生活者の視点」である。

“教えてよ／生活者って／だれのこと”1993年朝日新聞の投稿欄にのった川柳で始まる『生活者とは誰か—自律的市民像の系譜』で正子は欧米からの借り物の研究方法論ではなく、日本の暮らしに根付いた独自の「生活者」論を発表し、家政学の生活主体研究にも影響を与えた。『生活者』（“Seikatsusha”）は、消費者（consumer）や市民（citizen）と異なる日本の自生えの言葉である。2011年に『生活者とは誰か』の英語版『In Pursuit of the Seikatsusha: A Genealogy of the Autonomous Citizen in Japan』を、2012年には『現代「生活者」論—つながりを育てる社会へ—』有志舎を出版している。

#### 3-2 花森安治 〈くに〉をみかえす暮らしの美学

2006年2月に、平凡社から岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編で出版された『戦後思想の名著50』。名著50のトップバッターは、柳田國男『先祖の話』（1946）を磯前順一が解説している。大熊信行『国家悪』（1957）は安田常雄、宮本常一『忘れられた日本人』（1960）は赤坂憲雄が解説を担当。天野正子は、花森安治と松田道雄の2名の解説を担当する。

正子は「暮らし」あるいは「生活」という観念が市民権を得たのは、戦後になってからのことだとする。この指摘は重要である。戦前期を通して、暮らしや生活は真剣な思索の対象になり得ないと考えられてきた。というより、欧米思想の紹介と受容を重視する学問のあり方自体が、人々の現実の暮らしと切り結ぶのに必要な活力を蓄えることを阻んでいた。そこでは日本の思想、欧米思想の「出店」となり、人々の暮らしから乖離し、乖離することに「思想の本領」があるのだとすら考えられていた。（天野正子 花森安治

一銭五厘の旗 戦後思想の名著 50 平凡社 2006 p398)

暮らしという私領域は真剣な思索の主題になりえないと考えられた理由の一つの理由は、暮らしが女性によって担われてきたことにある。公／私を二分してとらえ、女性が担うとされる私領域は、思索の対象にするには価値が低いとみなされたのである。

民主主義の〈民〉は庶民の民だ／ぼくらの暮らしをなによりも第1にすることだ／ぼくらの暮らしと企業の利益がぶつかったら企業を倒すということだ／ぼくらの暮らしと政府の考え方がぶつかったら政府を倒すということだ／それがほんとうの〈民主主義〉だ。

戦後思想の名著 50 平凡社 2006 p402

花森安治が語るこのフレーズに正子が共感した気持ちが理解できる。天野の生活者論はオルタナティブという表現を使われることが多い。花森はこう生きるという意志を示した生活者であった。

### 3-3 生活概念4点の強み「包括的」「内在的」「当事者性」「相互関係性」への着目

生活の質 Well-being が、世界共通のお守り言葉として使われている。持続可能な社会を目指し近年学術と日常生活の距離は、近づいてきているように見える。学びの転換を示す一事例として、文部科学省の中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ（平成 24 年 3 月 26 日）で予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育むことが大学の責務とされた。「生涯学び続け、どんな環境でも「答えない問題」に最善解を導くことができる能力」育成があげられアクティブラーニングが提示されたことは、一見大学教育や研究と生活・暮らしの距離が近くなったことを示していると言えるように見える。

だが、若者も高齢者も将来を展望する生活設計は立てづらく、生活の質を左右する政策「生活政策」は大学研究室、学者の書斎、さらに情報機器が並ぶ大学や企業の実験室会議室や、経済成長を目指す行政の会議室で決定されており、地域や暮らしにしっかりと根付いて生活の質が議論されているかは疑問である。

表 3 天野正子「生活者」概念と外国生まれ類似概念の対比

思想の科学	時代 戦後混乱期	社会層 ・勤労者	対置される概念 ・大衆の「ひとり」 ・職業的哲学者 ・人民大衆	生活者の行動(運動)規準 ・自前のことばと思想を創る「個人」 ・小状況の決定者	外国生まれの類似概念 ラルフ・ウォルド・エマソン「の」コモン・マン (common man)の哲学＝独自の生活哲学をもつ能動的で文化的主体としての市民 アルビン・トフラーの「プロシューマー」(生産消費者＝prosumer)＝生産者と消費者双方の性格をあわせもつ新しい消費者像 (The Third Wave 1980)
花森安治 (1911～1978)	戦後混乱期	・都市中間層	・受け身の消費者 ・賢い消費者 ・経済性のみを追求する生産者	・暮らしを意識化し、暮らしの主体化をはかる暮らしの「美学」の実践者 ・消費者の立場を生産者の側にもちこみ、商品の質を変えていく挑戦者	アルビン・トフラーの「プロシューマー」(生産消費者＝prosumer)＝生産者と消費者双方の性格をあわせもつ新しい消費者像 (The Third Wave 1980)
大熊信行	高度経済成長期	・特定せず	・消費者	・生産と消費の循環を生きる「生活」主体 ・生活の「必要」と「欲望」を識別する主体 ・生命の再生産価値・使用価値の重視	well-informed citizen＝日常世界の「あたりまえ」や常識の自明性を反省的にとらえ直す理性的な市民 C・ライト・ミルズの「公衆」=the public

天野正子 2012『現代「生活者」論』有志舎 pp. 38～39 より上村抜粋

表 3 は、「思想の科学」「花森安治」そして家政学でしばしば登場する「大熊信行」の生活者概念を比較したものである。いずれも生活や暮らしという言葉に丁寧に向き合った例である。

ジェンダーという用語は広く知られ、佐藤文香・伊藤るり『ジェンダー研究を継承する』人文書院 2017 では女性学パイオニア 21 人に対してインタビューを行い、トップバッターには 1934 年生まれ原ひろ子氏へのインタビュー（2013 年実施）を掲載し、ジェンダー研究の基本姿勢は「自分の経験や問いからスタートする」ということがあるとされる。

本稿で見てきたように、正子はフリースペースとしての人間に「成長」があるとすれば、その源泉は人との出会いとつきあいにあるを持論として、自分の経験や問いからスタートして、自分のまわりに多くの重要な他者を呼び込む能力にたけており、(1) ジェンダー研究、(2) 老いがいい、(3) 生活思想のい



ずれにおいても、ロウ・アングルで「生活」の「現場」の発想から捉え、なかでも、注目されるものとして正子の最大の功績といわれる生活クラブ生協など活動専業主婦たちの経験を、提示した意義は大きいと考えられる。

正子の生活者論と現代生活学の関係を整理し、現代生活学と「生活」という概念がもつ包括的・内在的・当事者性・相互関係性4点の「強み」について検討し、タテの継承ではなく共感をもってヨコの継承ができる具体的な「つきあい」として展開する現代生活学の方法を探ることは今後の課題にしたい。

なお、天野正子の現代生活学は、2015年4月ご自宅にうかがい天野正子先生から直接課題をいただき(一社)現代生活学研究所のメンバーとの議論を継続してきた成果である。議論に丁寧につきあってくださった高橋淑子さん鬼頭由美子さんをはじめ現代生活学研究会メンバーに感謝したい。また、国際ジェンダー学会「現代生活学とジェンダー」分科会では、萩原なつ子さんをはじめメンバーの協力でラウンドテーブルを開催してきた。(一社)日本家政学会家政学原論部会 G11 グループでの議論からも多くの示唆を得た。

注1 『天野正子 生活と研究の歩み』(発行者 天野郁夫、制作有志舎、全38頁)は、お茶の水女子大学最終講義「わたしの研究のあゆみ」を加筆・再構成したものである。

注2 表3は上村協子『視点4:天野正子生活者論と家政学—家政学のエンパワメントアプローチ—』(日本家政学会家政学原論部会家政学原論研究 No.52)に掲載。

注3 天野正子の主要な共著など

- 1) 思想の科学研究会／編 集団—サークルの戦後思想史— 平凡社 1976
- 2) 山村健、天野郁夫／編 青年期の進路選択(女性人材論:職業的能力の開花) 有斐閣 1980
- 3) 中山茂 実学のすすめ—〈失業社会〉にそなえて— 有斐閣 1983
- 4) 天野正子／編 女子高等教育の座標 垣内出版 1986
- 5) 天野正子、長洲一二、縫田睦子男女共同社会を考える りょうせい 1987
- 6) 天野正子／編 女から男たちへ—自立と共生へ向かって— 朝日新聞社 1988
- 7) 天野正子他／編 女性ニューワーク論 有斐閣 1989
- 8) 安田常雄、天野正子／編 戦後体験の発掘 15人が語る占領下の青春 三省堂 1991
- 9) 天野正子、桜井厚／著 「モノと女」の戦後史—身体性・家庭性・社会性を軸に— 有信堂 1992
- 10) 佐藤慶幸、天野正子、那須寿／編 女性たちの生活者運動:生活クラブを支える人びと マルジュ社 1995
- 11) 安田常雄、天野正子／編 戦後「啓蒙」思想の遺したもの(思想の科学・芽) 久山社 1992
- 12) 上野千鶴子、天野正子他／編 家族論の現在(シリーズ変貌する家族) 岩波書店 1992
- 13) 天野正子／著 「オルタナティブ」の地平へ(新編日本のフェミニズム 4) 岩波書店 1994
- 14) 天野正子／編 団塊世代・新論—&lt;関係的自立 &gt;をひらく 有信堂 2001
- 15) 天野正子、木村涼子／編 ジェンダーで学ぶ教育 世界思想社 2003
- 16) 大門正克、天野正子他／編 近代社会を生きる—近現代日本社会の歴史— 吉川弘文館 2003
- 17) 大門正克、天野正子他／編 戦後経験を生きる—近現代日本社会の歴史— 吉川弘文館 2003
- 18) 天野正子／編 働く女性を助けた「モノ」のあゆみ:連続講座記録女子労働協会 2003
- 19) 天野正子、須賀由紀子 愛したくなる 家族と暮らし PHP 研究所 2003
- 20) 天野正子、桜井厚／著 「モノと女」の戦後史—身体性・家庭性・社会性を軸に— 平凡社 2003
- 21) 阿部恒久、大日方純夫、天野正子／編 男性史 1・2・3巻 日本経済評論社 2006
- 22) 天野正子、木村涼子、石谷二郎／著 モノと子どもの戦後史 吉川弘文館 2007
- 23) 石谷二郎、天野正子／著 モノと男の戦後史 吉川弘文館 2008

24) 天野正子他／編 ジェンダーと教育（新編 日本のフェミニズム 8）岩波書店 2009

注 4 上村協子（2014）試論『現代生活学』上村協子他、生活文化の世代間伝承による持続可能な消費—科研No.23300262  
平成 26 年度報告書、生活文化 ESC 研究会、をもとに本稿は執筆された